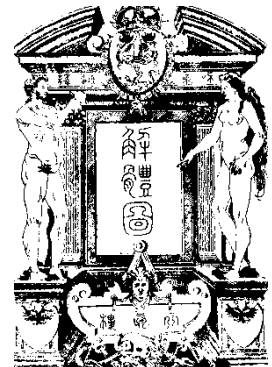


第 11 章	社会(歴史)	名前:	日 付	No.02
	江戸 2			

[問題 1]

次の各問いに答えよ。

- (1) 右の資料は、18 世紀後半に翻訳・出版された医学書のとびらである。
 ①この書名を答えよ。②また、この本を翻訳した人物を 1 人答えよ。
- (2) (1)の出版により、オランダ語で西洋の文化を学ぶ学問の基礎が築かれた。
 この学問を何というか。
- (3) 西洋の測量術を取り入れて、はじめて全国の沿岸を実測し、日本全図をつくった人物は誰か。
- (4) ①日本の古典を研究する学問を何というか。②また、この学問を大成し、「古事記伝」をあらわした人物は誰か。



[解答欄]

(1)①解体新書	②杉田玄白(前野良沢)	(2) 蘭学	(3) 伊能忠敬
(4)①国学	②本居宣長		

[解説]

[蘭学]

杉田玄白, 前野良沢: 解体新書

シーボルト: 長崎の鳴滝で医学を教えた

伊能忠敬: 日本地図

[国学]

本居宣長: 古事記伝

徳川吉宗が漢訳の洋書の輸入を許可してから、**蘭学**が発達した。蘭学者の**杉田玄白**と**前野良沢**はオランダの医学書を翻訳して**解体新書**を出版した。江戸時代後半に来日したドイツ人**シーボルト**は長崎の鳴滝で医学を教え、多くの弟子を育てた。

伊能忠敬は、幕府の命令で全国の海岸線を 17 年かけて測量し、現在とほとんど変わらないほど正確な日本地図をつくった。

仏教や儒教にとらわれない、日本の古典について研究する学問を**国学**といい、**本居宣長**により大成された。

[問題 2]

次の各問いに答えよ。

- (1) 前野良沢らと「解体新書」を出版した人はだれか。
- (2) 江戸時代後半、長崎に鳴滝塾をつくったドイツ人はだれか。

[解答欄]

(1) 杉田玄白	(2) シーボルト
----------	-----------

[問題 3]

次の資料を見て、以下の各問いに答えよ。

- (1) 資料 A、B の浮世絵をえがいた人物を、次より 1 人ずつ選べ。

〔 歌川広重 葛飾北斎 菱川師宣
喜多川歌麿 〕

- (2) 川柳とともに流行した、世相を皮肉った短歌を何というか。

- (3) 与謝蕪村や小林一茶で知られるのは、どんな芸術か。

- (4) こどもに読み・書き・そろばんなど、実用的な知識を教えるために開かれた教育機関を何というか。

- (5) 文化・文政年間に栄えた、江戸を中心とする文化を何というか。

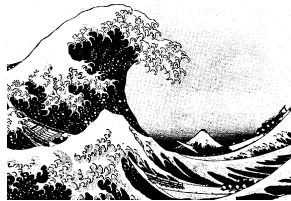
[解答欄]

(1)A 喜多川歌麿	B 葛飾北斎	(2) 狂歌	(3) 俳諧
(4) 寺子屋	(5) 化政文化		

[解説]

〔化政文化〕 19世紀初め、江戸が中心地

- ・俳諧：小林一茶、与謝蕪村
- ・狂歌や川柳
- ・十返舎一九「東海道中膝栗毛」
- ・滝沢馬琴「南総里見八犬伝」
- ・浮世絵：錦絵(多色刷りの版画)
- 〔風景画 安藤広重 や 葛飾北斎
- 〔美人画 喜多川歌麿



19 世紀の初め、江戸を中心に民衆の文化が栄えたが、この文化を化政文化という。

文芸では、世の中を風刺した狂歌や川柳が流行した。

(五七五・七七の短歌形式になっているものを狂歌といい、「役人の子はにぎにぎをよく覚え」などのように五七五の俳句の形式になっているものを川柳という。)

十返舎一九の「東海道中膝栗毛」のようなこっけいな小説が人気を集める一方で、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」なども多くの人に読まれた。

俳諧では、与謝蕪村が絵のような風景を表現し、小林一茶は素朴な感情をよんだ。

浮世絵の技術も進み、錦絵とよばれる多色刷りの版画が大流行した。

歌川広重(安藤広重)や葛飾北斎は風景画のすぐれた作品を残し、喜多川歌麿は美人画を描いた。

(右の「神奈川沖浪裏」は葛飾北斎の作品である)

[問題 4]

次の資料を見て、各問いに答えよ。

(1) 1853 年に訪れた右の 4 隻の黒船は、①どこの国から来たか。

②また、その国の使節はだれか。

(2) (1)のできごとの翌年に日本が結んだ条約の名前を書け。

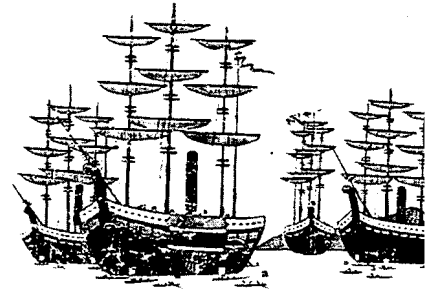
(3) (2)で開かれた港を次から 2 つ選べ。

[函館 新潟 長崎 兵庫 下田 神奈川]

(4) 1858 年には貿易を開始する内容の条約を結ぶことになるが、その条約を結んだ幕府の大老の名を漢字で書け。

(5) (4)の条約の内容には不平等な点が 2 つあった。次の文中の()にあてはまる語句をそれぞれ書け。

- ・日本で罪を犯した外国人をその国の領事が裁く(A)を認めた。
- ・輸入品に自由に関税をかける(B)が日本にない。



[解答欄]

(1)①アメリカ	②ペリー	(2) 日米和親	(3) 函館、下田
(4) 井伊直弼	(5)A 領事裁判権(治外法権)	B 関税自主権	

[解説]

1853年	アメリカの(ペリー)が浦賀に来航(黒船)
↓	
1854年	(日米和親条約)(下田と函館を開港)
↓	
1858年	(日米修好通商条約)(井伊直弼とハリス)
	函館・新潟・神奈川(横浜)・兵庫(神戸)・長崎を開港
	不平等な条約: (領事裁判権), (関税自主権)なし



1853 年アメリカの使節ペリーが、4 隻の軍艦(黒船)をひきいて浦賀(神奈川県)沖に現れ、幕府に開国をせまった。

アメリカは、貿易船や捕鯨船などが日本の港で燃料・水・食料を補給できるように求めた。幕府は、翌年の返事を約束してペリーをいったん引きとらせた。幕府は、このことを朝廷に報告し、大名などの意見も聞いたが、こうしたことは今までにないことで、幕府の力のおとろえを示す結果となった。

翌 1854 年にペリーは、再び江戸湾に来航し、回答をせまった。幕府は、やむなく、日米和親条約を結び、下田(静岡県)と函館(北海道)の 2 港を開き、燃料・水・食料を補給することと、下田に領事をおくことなどを認めた。

下田に着任したアメリカ総領事ハリスは、貿易開始のための条約を結ぶことを要求してきた。幕府は朝廷に許可を求めたが、得られなかった。1858 年、通商がさけられないと判断した大老の井伊直弼は、反対派の意見をおさえて、日米修好通商条約を結んだ。この条約によって、函館・新潟・神奈川(横浜)・兵庫(神戸)・長崎の 5 港を貿易港として開いた。しかし、この条約は、日本で罪を犯した外国人をその国の領事が裁く領事裁判権(治外法権)を認め、輸入品に自由に関税をかける関税自主権が日本にないという不平等なものであった。続いて幕府は、イギリス・オランダ・ロシア・フランスとも、同じような条約を結んだ。

開国後の最大の貿易相手国はイギリスであった。輸出品は生糸と茶で、輸入品は毛織物・綿織物・武器・艦船であった。

[問題 5]

右のグラフは、幕末の 1865 年の日本の主要輸出入品の割合を示している。

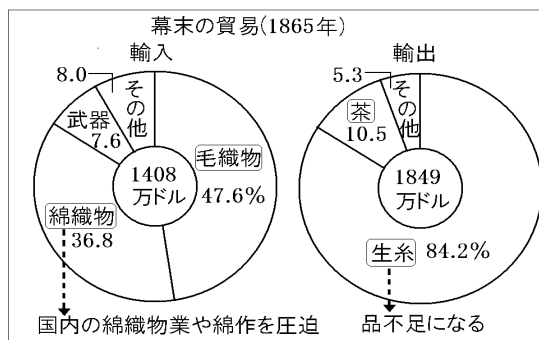
- (1) 輸出品を示すグラフは、A、B のうちのどちらか。
記号で答えよ。
- (2) グラフ中の I、II にあてはまる貿易品を、次から 1 つずつ選べ。

〔 米 毛織物 生糸 絹織物 陶磁器 〕

[解答欄]

(1) B	(2) I 毛織物	II 生糸
-------	-----------	-------

[解説]



開国後の最大の貿易相手国はイギリスであった。輸出品は生糸と茶で、輸入品は毛織物・綿織物・武器・艦船であった。

貿易が始まると、日本の経済は大きな影響を受けた。関税自主権がなかったために、イギリスの安価な機械製の綿織物が大量に輸入され、国内の綿織物業は成り立たなくなってしまう。

また、最大の輸出品は生糸で、輸出額の 8 割以上を占めていたが、このために国内の生糸が品不足となり、各地の絹織物業が圧迫された。

さらに、金と銀の交換比率が日本と外国で違っていたため、外国商人は日本に銀を持ち込み金貨を持ち出した。

これに対して幕府は金貨の質を落としたが、それは国内の物価の急激な上昇をもたらし、国内経済は混乱した。

[問題 6]

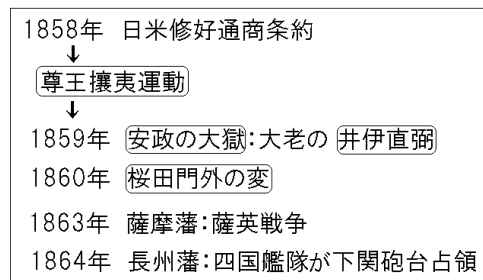
以下の設問に答えなさい。

- (1) 開国に反対した大名や公家を処罰したため、1860年に江戸城桜田門外で水戸藩などの浪士たちに暗殺された幕府の大老はだれですか。
- (2) 天皇をうやまい、外国人を排除しようとする運動を何といいますか。
- (3) (2)の運動で、長州藩はどこを通る外国船を攻撃しましたか。
- (4) 薩摩藩の武士が、生麦村(現在の横浜市)で行列を横切ったイギリス人を殺害したため、翌年イギリスから報復を受けた。これを何といいますか。

[解答欄]

(1) 井伊直弼	(2) 尊王攘夷運動	(3) 下関海峡	(4) 薩英戦争
----------	------------	----------	----------

[解説]



開国後の混乱の中で、外国や幕府に対する反感が武士や民衆の間に高まり、外国人を打ち払えという攘夷論が高まった。さらに、幕府が朝廷の反対を退けて開国したことから、攘夷論と、朝廷の権威を高めようとする尊王論とが結びつき、**尊王攘夷運動**に発展していった。

1858年に幕府の大老の**井伊直弼**は日米修好通商条約を結んだが、反対していた大名や武士を弾圧した。これを**安政の大獄**というが、これによって、長州藩の**吉田松陰**や越前藩の**橋本左内**は死刑に処せられた。しかし、かえって反発は強まり、1860年、江戸城桜田門外で、**井伊直弼**は水戸藩の浪人によって暗殺された。**(桜田門外の変)** 井伊直弼の死によって、**尊王攘夷運動**は勢いを得ていった。

1863年、幕府は、朝廷や大名の主張に動かされて、やむなく外国を排除する攘夷の命令を全国に出した。これを受けて**長州藩**は1863年、**下関**を通る外国船に砲撃をくわえた。

しかし、翌年、イギリス・フランス・アメリカ・オランダからなる四国艦隊に攻撃され、下関砲台を占領された。**薩摩藩**も、1862年、イギリス商人を殺害する事件(生麦事件)を起こしたため、翌1863年にイギリス艦隊に鹿児島を砲撃され、大きな損害を受けた(**薩英戦争**)。

これらの事件によって、長州藩と薩摩藩は、外国の軍事力の強大さを思い知り、攘夷が不可能であることを悟った。